

園長先生の子育てひろば

令和7年3月

園長 堀田 あけみ

3月がやってきました。年長さんが幼稚園児としての最後の時間を過ごしています。椋山幼稚園では外遊びや制作等、自由に動く時間が多いので、着席する時間が多い小学校の生活に慣れるのは大変かもしれません。では、先のことを考えて、席に着く時間を長くすれば良いかと言うと、一概にそうは言えません。幼稚園でしか経験できない時間をできるだけ、味わってもらいたいと思います。

これは、障害のある次男を育てる中で、修得したことです。障害児の療育は、ともすれば将来のためが先行します。こういうことができる大人になるためには、どうしたらよいか。それはもちろん大切な視点です。でもこれだけではいけない理由は、今を生きるのが楽しくなければ、日々の暮らしに張り合いがなくなってしまうからです。次男は幼稚園の頃には、まだ発話がとても少ない状態でした。だから、彼が幸福を感じているかどうかを私に教えてくれるのは、彼の笑顔だけです。私は一日一度は、必ず彼が思い切り笑えるように心がけていました。風に吹かれると、とても喜ぶ子だったので、強風が吹いてくれたら、それでいいんですけどね。花びらや葉っぱと一緒に散ってくれと、なおよし。

中には、表情が出にくいお子さんもおられます。それでも、こうしているときは機嫌がよい、というのはわかりますから、今日が幸せだと思えるような生活を心がけていきたいものです。次男の場合は笑顔がデフォルトでした。実はこれも困ります。いつも笑っていては、本当に楽しいのかどうかの確信が持てません。また、謝るときも笑っていると思われて叱られたりします。私自身が真顔でも笑っているように見えるらしく、コンプライアンス無視の昭和の教育では、「反省の色が見えん」と殴り飛ばしても良いとされる子どもでした。一番殴られたのは保育園ですね。「反省の色って何色ですか」と訊き返す5歳児（55年前の私）もたいがいですが。

無表情でも笑っぱなしでも、表情をコントロールできないのは困るので、次男は療育を通して、まず感情の存在を知り、それがどう呼ばれるかを学び、感情を表現する手法を学びました。「喜怒哀楽」で言えば、「喜」「楽」はデフォルトなので特にトレーニングの必要なし。「怒」の表現は下手に覚えても損をするので「哀」に振り替えるようにします。結果、「哀」をどう表すかが問題になります。彼は腕を目に当てて泣くというベタな手段を獲得して現在に至ります。記号としては「哀」ですが、現実問題として、そういう泣き方はせんやろ、という。それでも、理解ある職場や上司に恵まれて、その仕草を「辛いよね」「優しいから泣けるのね」と解釈していただける、ありがたい限りです。

その日の幸福と、明日のためのテクニックの獲得と。考えながら過ごした久しぶりの幼稚園での時間は、もう1年を過ぎようとしています。子ども達も来月には、年長はさんは小学生になり、年中さんは最高学年になり、年少さんはおにいさん・おねえさんになります。それぞれの立場で過ごす、残り少ない時間、笑っていられるように、精いっぱいサポートをしていきます。新しい生活でもたくさんさんの幸せを、どの子も手に入れてくれますように。